東京日々新聞

九百七十八号

長月小月村の京泊りと云ふ所の長八合川熊吉と云ふ者の女房おせゑは去年十月ころより阿部の晴明とか云ふ狐が乗り移りたとて色〻妙なる事ども云ひ觸らけ近村の人まで聞き傳へて何うぞ火災を免れる様ふと祈願して京泊より稲荷の社を建立して小豆餅や油揚を備へて鼠の油煎などのお洗米などと躍ぎ立けるが國中の大評判となり参詣する者引も切らず炎熱を忘て貰へば何の様な病氣でも治ると云ひ或い手の相を見て貰へば運の吉凶が別るゝなど持て囃して蟻の如く集りけるが風と或る人より此稲荷はまぐ官位があらら京都へ位を受けに行くが越いと云ふ相談が始まりて商人仲間で何程かの金を調ゝ本年一月中旬ふかもゑの亭主熊吉と隣りの金六が女房おすゑと連れ船よりて出帆せしが備後の尾ノ道にて上陸して或る酒樓にて路用を皆る飲んで仕舞ひ上京する事も出来ず詮方が無く成りて遂に帰る事に成りしが三人倶に道々南無妙法蓮華經〻と唱へて人の門に立つ〻稍〻藝州の廣島まで帰り來り暫らく〻

惚て成り國へ帰りて亭主熊吉と國元へ戻り路用の工面とて帰國しがおせゑ稲荷さまの繁昌多く此なす為様に貴助と云る時に同國の瀬川百九と云ふ者と同伴して船の中で乳母おせゑ